モノグラフ
中学生の世界
vol. 27

# 中学生の母親

～その子育てと生活充実感をめぐって～

## 目次


特集●母親の自己価値感をめぐって……深谷和子……2

調査レポート●中学生の母親……深谷和子……14

本報告書の要約……14

はじめに……16

第Ⅰ章 調査対象の属性……17

第Ⅱ章 子どもはうまく育ったか

1．4つの側面で……20

2．親子関係……22

第Ⅲ章 子どもをどう評価するか

1．軽さと重さ……23

2．母親の属性との関わりで……26

第Ⅳ章 子どもの将来について

1．親たちによる性差別……27

2．ビッグを望まない……28

3．献身はごめん……30

第Ⅴ章 母親としての自信

1．母親と比べた自分……32

2．両親のイメージ……34

第Ⅵ章 母親たちの自己価値感（セルフ・エスティーム）

1．あなた自身を好きですか……36

2．自分と母親との間に……37

3．自己価値感を低下させる条件……38

4．自己実現との関わりで……40

資料1 調査票見本および集計表……42


※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

特集

# 母親の自己価値感をめぐって

## ——よき母親性を生み出すために——

東京学芸大学教授　深谷和子

母親たちへの世間的な風当たりは当節かなりきついものがある。子どもたちが起こす数数の問題行動、例えば「いじめ」、非行、登校拒否などが社会問題としてとり上げられるたびごとに、子どもたちの母親が母親としての役割を果たしていない、すなわち母親能力とでもいうべきものが低下しているとか、母親たちの怠慢だとか、本来備わっていたはずの母性を失ってしまっているとか、共働きで子どもを他人まかせにしているからだとか、その都度母親への非難の大合唱が聞こえてくるかのようである。

しかし「母親らしさ」とは一体何なのか、よき母親とはどんな母親なのか、つきつめて考えてみるとよくわからなくなる。考えてみると、人類の歴史が始まって以来、およそ母親ほど、多くの人びとに愛され、尊敬され、憧憬をもたれてきた存在はなかったといえるだろう。時代は変わり、社会は異なっても、母親はこの世における永遠で最大のスターでありつづけている。

母親とはいつの世もあらゆる人びとの間で共通に「暖かく、忙しく、献身的」というイメージでとらえられているが、このように理想化されたイメージの成立はしばしば母親たちの行動を不自由にもする。母親が母親としてではなく、人間として、自己の要求を比較的忠実に充足しようとすると、それはしばしば「母親らしくない」行動として非難の対象になる。これまで社会的に作りあげられてきたイメージと、生身の人間としての現実の行動の間のずれに非難が向けられることとなる。

今日、科学技術の進歩によって人びとの生活は大きく変化した。しかし母子間の人間関係と育児の様式や技術は、その中にあって、もっとも変化をこばみつづけている部分である。しかし、子育ての中で母親がどうしても関わらなければならない側面は何なのか。今日求められているのはこのテーマではなかろうか。母親として何をいちばん大切にしなければならないのか。種々の事情で全部の役割を果たせないとしたら、どの部分の役割を重点的に果たせばよいのか。その点が明らかにされれば、母親たちの生き方はもっと自由の幅を広げることができるだろう。

# 1．母親らしさとは何か

## 母親の役割

**① 子どもの生存を援助する**

母親は、ツバメがそのヒナに餌を運ぶように、子どもの生理的生存のためにあらゆる援助をする。赤ん坊への授乳、おむつのとりかえ、衣服の調節等、育児行動とよばれる行動のすべてがこれに含まれる。いわば、これはもっとも原始的な動物的水準での行動であり、その様式は異なっても、ヒトやサルまたその他の哺乳類にもほぼひとしく見いだされる行動であり、役割であるといえよう。

**② 子どもに精神的安定を与える**

この面での母親の役割は、ヒトに固有のものであるか、それとも前項ほどの一般性はなくとも、他の高等動物の間にも見いだされる役割であろうか。サルの行動観察の中から、資料をひろってみよう。

日本ザルの社会は、その氏（血統）や育ち（実力）によって、序列ある社会構造をもっている点で、ヒトの社会ときわめて近似しているといわれる。水原洋城氏によれば、1～3歳の子ザルの序列の順位はまだ決まっておらず、ピーナツを投げると早いものがちに拾って食べる。しかしもし自分の母親がそばにいれば、子ザルは母親のいない子ザルに勝ち、逆であればその競争に負けてしまうという。

これと同じような現象はヒトの幼児においてもしばしば見いだされる。自我が弱く人格が未成熟であるほど、親からの支えによって不安や緊張を解消し、自我を強化する必要が生じてくる。

もしこのような役割を果たす母親がそばにいない場合は、それに代わるものを求めて、精神的安定をはかろうとする。

川辺寿美子氏は生後3日で母親から隔離された赤ん坊ザルの飼育記録の中で、次のように報告している。哺乳器の周囲の毛皮に対して子ザルは特別な愛着を示し、生後1か月もすると、人間（飼育者）がいないと「眠るときはつねに毛皮にもたれており、あるいは、ケージの外をみて、外のものにちょっとふれようとするときも、もう一方の手は必ず毛皮をつかんでいた。毛皮も（飼育者と共に）彼にとっては、心理的慰安を与えてくれる特定なものになっていたのである」「トンビが小屋の上空を低空飛行したとき、異様な叫び声をあげて毛皮にしがみつき、顔をふせた」また「ふだん見知らぬヒトが小屋をのぞきに来たときも、彼はそれまで遊んでいた枝からとび降りて、真中におきざりにしてあった毛皮のところに駈けつけ、しがみついて、そのヒトの方をふし目がちにうかがう」

これはヒトの赤ん坊が、毛布やタオル、ビロードやシュスの布などに愛着を示したり、ゆびしゃぶりをしたりするのと同じ現象である。このような習癖をもつ赤ん坊は、早期自立を目標にし母親との身体的接触が少なくて、心

理的にも母親と接触する時間がわずかだったケースに多く、母性喪失の代償的行動としての意味をもつことが多いとされる。

乳幼児期とは、周囲をとりまく多くの未知な刺激に接触し経験を拡大していかねばならない時期であるが、子どもの側は、刺激感受性が強く心理的に傷つきやすい時期でもある。この時期の母親の役割は、子どもの受ける種種のストレスが、外傷経験となって残らないように配慮し、次の新しい刺激への接触や新しい経験へ再び挑戦できるよう子どもを動機づける。これは、赤ん坊がやや成長してからも（その比重は次第に減少するものの）やはり重要な役割の一つだろう。野生のサルにおいて、赤ん坊ザルや子ザルが母親の周囲に集まって暮らすのも同じ理由からと思われる(赤ん坊ザルたちが母親ザルから離れて集まり、仲間集団を形成するのは、ほぼ生後半年後からであるという)。従って、精神的安定を与えるという機能は、母親の果たす役割のうち最も基本的で、他の動物とも共通で重要なものと思われる。

**③　しつけのにない手として**

幼い生き物たちに、その社会の文化様式や社会規範を学習させるプロセスは、とくにヒトのような複雑で膨大な文化体系をもつ種においては重要な意味をもっている。ヒトにおいて、とくにこれは「しつけ」とよばれる行為の体系である。

人間以外の動物には、文化と名づけられるものをほとんど見いだすことができない。ヒトにもっとも近いサルの社会においてすら、文化とみなしうるものはわずかに順位制とそれに伴う作法等にすぎないともいわれる。しかもサルの社会では、このような文化の伝播や継承は、模倣行動によってのみ行われる。親たちや年長者からの積極的な働きかけや教育活動はなく、母親ザルや仲間を見て覚えるといった過程にすぎない。

従って、幼い生物を社会化（教育）する役割は、ヒトの母親（父親）に固有の役割といえるだろう。

**④　女性的パーソナリティーのモデルとして**

ヒトの社会には、性に伴う社会規範が存在するので、子どもはその成長の過程の中で、十分な性同一視を確立する必要がある。これは同性の親に対して、幼児期のごく初期に成立する過程であるが、もしこれが十分でなかったり混乱があると、子どもは性に適切な行動の獲得ができず、同性愛をはじめとして、種種の問題行動を生み出すこととなる。

従って、母親と父親は、その社会においてそれぞれその性のもつ行動特性をある程度身につけていて、子どもの性同一視の対象にふさわしい存在であることが必要となる。とくに女の子の場合、母親がモデルとして、適切で、かつ性同一視が十分に行われないと、後日母親となった際にその母親役割をスムースに受け入れられず、よい母親行動がとれないことも出てくるかもしれない。

サルをはじめとして、他の動物にこのような性による文化規範が存在しないのはいうまでもない。

**⑤ 他人をとらえるわくぐみとして**

母親は、赤ん坊がこの世界において初めて出逢う人間であり、またもっともひんぱんで密接な接触と関係を保つという意味で、父親とはやや違った役割をもっている。

すなわち、母親がその子どもの要求をいかに受け入れいかに充足させるか、子どもをどのように評価するかは、そのまま後日彼が外界を把握し、基本的な人間観を獲得する際に、基礎的なフレームとなる。すなわち他人をどう理解するか、他人にどうふるまうかの基本的なわくぐみを形成するものである。もし母親が子どもを愛し信頼するならば、子どももまた母親を愛し信頼するであろう。母親とは、愛し信頼する価値ある対象として子どもの目に映じるだけでなく、やがてそれは一般の人間観へと汎化してゆくだろう。すなわち他人一般を基本的には母のように信頼し愛する価値のあるものとして、また母親がそうであったように自分を愛し受け入れてくれる存在であるとして把握するであろう。もちろんこのような人間知覚のわくぐみは、その後に経験される多くの社会的接触によっても少しずつ修正されてゆくものであろうが、人間形成上きわめて初期の経験は、それが言語的・知的水準で形成されたものではなくそれ以前の感覚的水準で獲得されたものであるだけに強固であり、その修正は容易ではないとされる。この意味で初めて出逢う人間としての母親の果たす役割の重要性が指摘できるだろう。

## 母性とその形成

母性という語は、きわめて多義的なものだが、ここではこれを「母親の役割（前に指摘した①～⑤）を部分的に、また全体的に遂行する能力」と考えてみよう。もっとも、このような役割遂行の底辺には「子ども好きの感情」や「子どもへの責任感」といった要因も働くだろう。しかしここではとりあえず、5つの役割について考えていくことにしよう。

母性はいかに形成されるか。それは、よく言われるように、先天的、本能的にヒトがもっているものなのか、それとも学習によって身につけていく技術なのか。例によってサルの観察記録の中から、推論の手がかりをうるとしよう。

ハロウ(Harlow, H.F.,1963年)は、生後直ちに母親から隔離され、母親ザルに養育された経験をもたない子ザルが成長して母親となったときに示す行動を観察した。これらの母親ザルは、「母親に育てられなかった母親ザル」と名づけられた。もし「母親に育てられなかっ

た母親ザル」が自分の子どもを十分に扱うことができれば、母親の示す育児行動は学習の結果ではなく先天的なもの、すなわち「本能的行動」とみなすことができるわけである。

ハロウの実験に使われたサルは4匹で、そのうち1匹は針金製の円筒から、3匹は布製の円筒(針金の円筒の上に布をかぶせたもの)から哺乳され、母親ザルからの哺乳や保護はもちろん、他の母ザルの育児行動をもみたことのないサルたちであった。これらのサルが母親になったとき自分の子どもに示した態度は共通して、「無関心」と「攻撃」のいずれかであった。子ザルのほうでは、母親への接触を求めて何度もまとわりつく。そのたびに母親は、打ったり首を押さえて床に顔をこすりつけて子ザルを拒否した。また、他の(正常な)母ザルたちは、わが子を常に注視しているので、他の子ザルたちを見ているひまがないが、「母親に育てられなかった母親ザル」はわが子に無関心で、しばしば他の子ザルをもの珍し気に眺めていたと報告されている。

宮地伝三郎氏によれば「生後まもなく母親や群から離したアカンボばかりで編成したモンキーセンターの群が育って、アカンボを産んだが、母ザルに育てられなかった母ザル(non-mothered mother) のあつかい方がまずくて、逆さに抱いたり、床の上にほうり出しておいたりするし、オスザルがそれをおもちゃにして、眼に指をつっこんだりするので、どれもうまく育たなかった」

すなわち、動物のうちでも進化の度合いの低いものについては、巣作りや育児行動は全く本能的なものであろうが、人間に近づくにつれて育児行動の中に本能の占める割合は次第に稀薄となり、大部分がモデルの行動をみて学習した結果すなわち、多分に文化様式化してゆくと考えられる。ましてサルよりも一段と高等なヒトにおいては、本能の占める割合がわずかなものであることは間違いのないところであろう。

しかしサルの場合、育児行動を支える要因として、本能的なものが全くないわけではない。再び宮地氏によれば、死んだアカンボザルを母ザルが抱きつづけ、これがミイラ化している例は飼育ザルでも自然群でも同様に見いだされるという。しかし、これを母性本能の極地というには問題があり、「幸島群を見ている三戸サツエさんによると、抱かれる死児は、母ザルの腹につかまって乳をのんでいる期間に死んだアカンボに限られていて、死産の場合は執着をみせないし、生後4か月以上たって死んだのは抱かない。これは母性愛というより、母性生理というにふさわしい」また、「アカンボを亡くしたメスが、劣位メスのアカンボを奪って母性本能を満たすのは、よく見られる事件で、いざこざは長く尾をひく」と報告している。

このように育児行動への内的動機づけは、多分に妊娠と出産に伴う生理的な条件に支配される時期があることが推定される。しかし、それが出現する時期は限られており、またその時期といえども下等動物のようにムレの中での学習を不必要にするほど強烈に出現するものではないことも確かであろう。しかしこ

のような生理的条件と学習要因との比率には多少の個体差があることも考えておかなければならない。たとえば、同じ母鳥の卵から生まれた十姉妹のうちでも孵卵をじょうずに行う親とそうでない親がしばしばあり、犬や猫でも真冬に生まれた子どもを腹の下にかかえて上手に育てる母親と、保護が足りず、凍死させてしまう母親とがいる。同じようにサルにも「子煩悩なサルと薄情なサル」があり、それによって、母ザルを呼び求めたり乳をねだったりすねたりするアカンボの発声の頻度も変わるといわれる。

では半ば生得的に持っていたはずの母性が、なぜ最近ヒトの中に十分に形成されなくなってきたのだろうか。

**（A）社会的条件**

**① 性役割の稀薄化**

これまで本来の生理的性差を極端に拡大した形で人びとに受け入れられていた性役割は、モノ・セックス時代の言葉が象徴するように、近年大きく混乱してきている。女性であれば家庭に入りハウスキーピングと育児に専念する以外に道のなかった昔に比べ、その行動の自由度は大きく増加し、働く母親や積極的に子どもを生まない女性、結婚しない女性もふえてきている。ヒトは、本能的に母性的行動をとるには進化論的にいって進化しすぎた動物であるのだろうが、それでも社会規範による行動規制のおかげで、これまでどうにか母性的行動を遂行していたと言えそうだ。しかし近年このような規制がゆるやかになるに従って、母性的行動の遂行は一層不十分となり、それが種々の問題を生みつつある。妻および母志向（wife and mother orientation）から職業志向（career orientation）へとむかう女性の比率がますます増加しつつあるのはその一つのあらわれであろう。フロイドのペニス羨望説に代表されるような、男性役割の価値の高さとそれをとり入れたいとする女性の欲求は、昔のように抑圧されることなく行動化できるようになった。やっかいな行動規制を伴う女性役割や母親役割を拒否する女性が増加し、女性・母親同一視が十分行われなくなったのも、時代の趨勢であろう。

**② 家族サイズの縮小とモデルの喪失**

たとえば明治時代は、子どもの数も一世帯に5～8人がふつうであり、中には10人を超える家族もあって、拡大家族が一般的であった。コミュニティーは閉鎖的であり、人間関係は密接に保たれていた。従ってそこで育つ子どもたちは、母親たちが弟や妹に行う育児行動を常に目にしており、また実際に「子守」という育児行動の実習は、多くの幼い弟や妹をもつ子どもたちにわりあてられる重要な課題の一つであった。また近隣でもそのような育児行動を実際に目にしながら成長したといえよう。

しかし、最近では、子どもの数はせいぜい2～3人であり、従って、自分の母親や近隣のおとなが、幼い子どもたちの世話をする姿を目にする機会は次第にへってきた。母性的行動のモデルの欠如は、いまや一般化されつつあるといえよう。

**③ 家族の結合度の弱小化**

戦前の日本には、がっちりときずきあげられたイエ制度があった。イエは単なる個人の存在を離れ、世々代々守りつがれるべきものであった。イエを守るために家族は連帯し、そこでイエをつぐべき次世代を社会化することは、きわめて重要な役割の一つであった。しかし今日イエは崩壊し、家族は主として夫と妻の愛情的結合のような、きわめて不安定な要素に支配される集団となった。このように個人的な要因（愛情的結合）が強調されることは、必ずしも次世代（赤ん坊）の養育への積極性をもたらさないこととなる。場合によっては、赤ん坊は、個人の自由な愛情的結合への障害物（離婚などの場合に）とすらなることがある。このような点からも、育児行動の意味が変化してきたことが考えられるだろう。

**（B）個人的条件**

**① 母親との同一視の失敗**

何らかの理由から同性の親との間によい感情が発展させられずに成長した場合に適切な性役割がとり入れられず、それが性の異常行動（たとえば同性愛）を形成することが、しばしば臨床的に報告されている。また性の異常をひきおこすほどの決定的な同一視の失敗ではなくとも、母親の拒否的態度、他のきょうだいへの偏愛、未成熟な性格等は、母親同一視（すなわち、母親を愛の対象とし、そのような人物に自分もなりたいという自発的な動機づけ）を不完全にすることになる。それが「母親のようになりたくない」という無意識の態度となって、わが子に対する拒否的行動を生むこともある。いずれにせよこのような同一視の失敗は、母性的行動の成立の障害となることが予想される。

**② モデルの欠如**

一人っ子、末っ子、働く母親の子ども、近隣から孤立した家族の中で育った子ども、わが子を世話したがらない母親の子どもなど、養育行動のモデルとの接触がとぼしかった場合や、また自分の上に十分な養育行動を経験したことのない子どもがこれにあたる。これらの子どもたちは、母親となっても具体的な育児行動のパターンを知らないため、十分な母性的行動がとれないことになるだろう。

**③ 愛情を経験しなかった子ども**

他人から愛された経験のない人間は、他を愛することも知らないといわれる。とくにホスピタリズムのように、人生の初期に十分に個人的愛情を体験しなかった子どもには、感情の起伏に欠け他人と積極的な関係をむすぶことのできない人格が形成されるともいわれている。それほど極端なケースは別としても、継続的に愛情を経験しない状況の下で育った子どもは、母親となっても感情のレベルでは子どもとよい関係が形成できないかもしれない。

**④ 責任感の欠如**

すでに指摘したように、子育てを支える要因としては愛情と共に責任感の存在が考えられる。これは人間の育つ過程において形成される重要な態度の一部であろう。もしこの面での態度が子ども時代に十分身についていないと母親となって後も、育児行動に欠ける面

が生じてくることが考えられる。

**⑤　望まない出産**

母親にとっての不幸な条件、たとえば経済的貧困、夫との不和、自分の活動の制限を生み出す状況などの中での出産は、その後の育児行動の質を低下させる一つの要因となるだろう。母親の役割を遂行するには、そこに大なり小なり自己犠牲および献身が必要とされる。これらを、自己犠牲と感ずることなく行動できる感情があってこそ、母性的行動が十分に可能になるといってよいだろう。しかし、育児以外に自己実現の領域をもっている場合（たとえば職業生活）や、遊び、休息、他の趣味や活動などの要求を強くもっていると、育児行動への専念は妨げられる。戦前の日本のように、性役割規定が厳密で、子育て以外に女性のとるべき道が与えられず、それが当然のこととして受け入れられた時代には、出産が望まれ育児行動がはるかに熱心に行われたことは当然と思われる。

**⑥　母親代理の存在**

依存的で未成熟な女性が母親になった場合に実母等の母親代理があると、育児への責任感は薄くなり、母親として必要な態度はいつまでも学習されずに終わってしまうかもしれない。「母親性」は経験と学習から作り上げられるものであるから、そうした場合は「母親性」が育つ機会が与えられないことになる。

**⑦　母親の疾病その他**

身体的に虚弱な母親の場合に、育児はきわめて荷の重い活動であり、そのため無意識に子どもに拒否的態度を示す場合も少なくない。また何らかの理由で母親の、女性として妻としての幸福度が低い場合も、世話のやける子どもに対して許容性が減少し、適切な母性的行動を欠くようになることが考えられる。

## ２.子育てから生み出されるもの

このように母親らしさの多くは作り出されたものにせよ、とにかく、母親はその人生の大部分を費してわが子の養育にあたる。しかしその途中でまた子育てを終わりかけた時点で、子育ては母親たちにとって十分な生きがいや自己成長を生み出す行為だったととらえられるものだろうか。

この点を臨床心理学の中で重要な概念とさせる自己価値感(セルフ・エスティーム)との関わりで少し深く追及してみよう。

### 自己価値感とは

セルフ・エスティームという語は、たぶん初めて耳にされる方が多いだろう。しかし、臨床心理学では個人の人格適応を規定する重要な概念として、よく使われている。ロロ・メイ（Rollo May, 1972年）はこれを「人間としての重要さの感じ」(Sense of significance as a person）であり、それが自己を外界に対して主張させる働きをすることを指摘しているし、またクーパースミス(Coopersmith,S.,1967年）は、高いセルフ・エスティームを持っている人は、人間としての可能性（capabilities）と独自性（distinctness）のイメージを自分の中にもっていること、また創造性のある人や社会的に積極的な行為をする人が、高いセルフ・エスティームの持ち主であることを指摘している。

話は少しむずかしくなったが、要するに筆者がテーマにしたいのは、人が自分についてもっているイメージ（自己概念）がどれほど価値的なものであるかによって、その人の行動は積極的にも消極的にもなるという点についてである。

たとえばここに双子の姉妹がいるとしよう。一卵性の双子だから顔かたちはほとんど変わらない。しかし何らかの理由で姉のほうは自分は美人の部類に属すると思っており、妹のほうはむしろ醜いほうだと自分をとらえていると仮定しよう。姉のほうは美しい自分を一層きわだったものにしようと、華やかでカラフルで流行の先端をいく服を選ぶかもしれない。ところが妹のほうは、ひかえ目で目だたず、無難な服を選ぶことになりそうだ。

派手な服を着た姉は他人の「よくお似合いですね」というオセジに力を得て、次回も一層派手で自分を引き立たせる柄やスタイルを選ぶだろう。そして長い間に姉のほうは周囲から「オシャレさん」と言われつづけ、いつの間にか華やかで美人の雰囲気をもった人になっていることは十分予想される。

しかし妹のほうはいつも暗い目立たない色の服を着ているので、人びとは彼女をオシャレだとは思わないし、そのことを話題にしてほめることもしないから、彼女は一層自分を醜いと思うようになる。服装のセンスもみがかれないから、その服はいつも季節や場とはチグハグだ。

こうして十年二十年と経つうちに、一方は美人、他方は目立たない平凡な女性として、行動の仕方までまるで変わってきてしまっても不思議ではない。その出発点は、ただ単にちょっとした「自己イメージ」の差だったのに。

このように考えてくると、自分についてのイメージはどちらかというとやや積極的であるほうがいいことになる。そのほうがより生産的で前向きの行動を生み出すことになるからだ。むろんそれが「自慢、虚栄、尊大、虚飾」と名ざされるほど大きくて、現実とかけ離れたものであっては困る。「自分への誇り、自負心、健康な自己愛」の程度の自己の（多少の）過大評価であることが望まれよう。

## 自己実現との関わりで

このような自己についてのイメージはまた深いところで、自分の生きる意味にもつながっている。

いわば、人生が生きるに価するものと感じられるか、自分の人生は意味があるのか。すなわち生活の中で、人が「生きがい感」を感じられるかどうかは、前にふれた自己価値感の有無によって大きく違ってくる。毎日の生活が充実と張りをもって送れる状態は、たぶん自己価値感の存在なくしてはあり得ないだろう。

こうした自己価値感を、臨床的に測定しようとの試みは、たびたび研究者によって行われてきた。その一人、ローゼンバーク（Rosenberg, M., 1965年）は、これを次のような項目を用い、4件法で測定しようとした。

①私はすべての点で自分に満足している
②私はときどき、自分がてんで駄目だと思う
③私は、自分にいくつか見どころがあると思っている
④私はたいていの人がやれる程度には物事ができる
－⑤私はあまり得意に思うことがない
－⑥私はときどきたしかに自分は役立たずだと感じる
⑦私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う
－⑧もう少し自分を尊敬できたらと思う
－⑨どんな時でも例外なく、自分を失敗者だと思いがちだ
⑩私は自分に対して前向きの態度をとっている

（星野　命訳）

彼はこれを用いて種々の対象を測定し、多様な個人差がどういう条件の下で生ずるかを明らかにしている。このテーマの詳細な論議はまた別の機会にゆずるとして、筆者はかねがねこれと関連して「母親」の自己価値感に関心をよせてきた。いわゆる自己実現（self-realization）や自己現実化（self-actualization）などは、とくに専業主婦（母親）たちによって折々に口にされる、またはその胸の中にある語である。自分の人生が、果たして

自分の可能性を十分に発揮し得たものだったのか。とくに主婦（母親）たちの多くは、夫の人生を支え子どもを育てるという、いわば代理的な自己実現の形をとらざるを得ない立場にあるため、一層この疑問が胸に去来するのであろう。

## よき母親性を生み出すために

教育相談を通してかい間みる母親の姿――つまり、何らかの問題をもった子どもの相談でクリニックに援助を求めてくる母親たちの姿は、一様に自己価値感を失って、一時的にせよ悔恨、当惑、卑下、屈辱、あせり、失望など、さまざまなネガティブな感情にとらわれ、うちひしがれた状態にあると言ってよさそうだ。または子どもに対しての恐れや敵意や憎悪の感情を抑えられずにいることもある。そうした子どもへの感情に気づかずにいる場合はまだしも、それを意識した場合には、一層母親としての資格のない者として自責や自己嫌悪の感情がひき起こされ、二重に母親を苦しめる。

しかし子どもの成長やいい子ぶりが、母親の自己実現のすべてであった時代はもう過去のものではなかろうか。いや、それを過去のものとしなければならないのではなかろうか。こうした態度をもちつづける限り、母親は自分と子どもを切り離せず、子どものすべてに支配的であろうとしつづける。または逆に、自分がごくふつうに仕事をもったり、ささやかな楽しみを求めたりすることすら、「悪い母親」というイメージにつなげてしまっておちつかなくなる。これではかえってよき母親となることを妨害してしまう。

筆者は、わが子を問題をもった子に育ててしまったことで、うちひしがれている母親――そのために自己価値感を失った状態にいる母親に対して、治療者（カウンセラー）のなすべき仕事は、まず「私はあなたのお子さんが好きです。好意と関心をもっています」という態度を示すことだとよく初心者のカウンセラーに助言する。母親には子どもの補助治療者として十分に機能してもらわなければならない。しかし母親が子育ての失敗によってうちひしがれた状態にあり、その自己価値感の中心部分を失ったままでは、決して補助治療者としても、むろんよき母親としても機能できない。そのためにはまず母親の自己価値感を部分的にせよ十分回復させてやることである。

そのためには

①母親が（結果は失敗かそれに近い状態だったにせよ）よい子を育てようとしたその努力と気持ちは認めてやること

②母親に私はあなたのお子さんが好きだ、と伝えてやろうとすること

③決して遅すぎない（子どもの発達の軌道修正に）ことを伝えようとすること

の３つの態度の表明を、カウンセラーや相談者としての担任に助言することがしばしばだ。

## 「あなた自身を好きですか」

こうした自己価値感は、しばしば前掲のような項目での測定が試みられているが、最近になって筆者はこれを「好き」という語に置きかえて質問紙調査の項目に入れてみている。すなわち自己価値感が自分に対して肯定的感情をもてるかどうかであれば、「あなたを好きですか」と問われて、(「とても好き」とまではいかなくとも)いくつかの欠点はあっても「まあ好き」と答えられる状態があるかどうかをみることで、自己価値感の有無に限りなく接近できるのではなかろうか。

このような自分への肯定的な感情があれば、人生はその母親にとってほぼ充たされた感じで受けとることができるものとなり、他人(子どもや夫を含めた）に対する態度も、ずっとおだやかで許容的なものになるだろう。そのためにはすでに指摘したように、他人（この場合は職業的援助者としてのカウンセラーや担任）が、まず、母親の代理的自己実現である「子ども」に対して何よりも好意と関心を抱くことであろう。自分が心をこめて育て上げた子どもに対し（世間は問題児としてレッテルを張るが）一人でも限りない好意とその価値を認めてくれる人がいれば、それで母親の失われた自己評価感は、もう一度成立するのではなかろうか。

本レポートは、母親のこうした自己価値感にさまざまな側面から接近し、とりわけ子どもの成長ぶりがそれとどう関わりをもっているかを調査的に明らかにしようとしたものである。

調査レポート

# 中学生の母親

## ～その子育てと生活充実感をめぐって～

東京学芸大学教授　深谷和子

## 本報告書の要約

**① 調査のねらい**

昭和53年実施の母親調査(『モノグラフ・中学生の世界』vol. 3「中学生の母親の意識」、以降前回調査と呼ぶ)にひきつづき、中学生の子どもをもつ母親たちが、その生涯の中でどんな時期にあるのか、その子育ての姿と生活充実感の周辺を探ろうとする。彼女たちは中学生のわが子がどう育っていると評価し、それとの関わりで自分の母親ぶりをどう自己採点しているのか。

**② 調査対象と時期**

調査対象となったのは、東京と埼玉の3つの公立中学校に在学する生徒の母親1,321名で、調査時期は昭和61年7～8月、学校通しで生徒に調査票を持ち帰ってもらい、記入されたものを回収した(P.19表1)。なお、一部分比較のために東京と神奈川の幼児をもつ母親678名（昭和60年7月調査）のデータ、また前回の調査データを引用した。

**③ 前回調査との関わりで**

中学生の母親のもつデモグラフィックな属性を前回のデータと比較すると、この8年間でフルタイム勤務者と家業の手伝い(自営)はほぼ変わらない割合だが、専業主婦が5割から3割にへり、代わってパートタイマーが2割から3割にふえている。また大卒・短大卒の割合はほぼ変わらないが、中卒者が1割へって、その分高卒者が1割ふえている(P.19図3)。

**④ 子どもはうまく育っているか**

中学生のわが子がうまく育ったかについては、領域によって評価の差があり、健康＞性格＞しつけ＞学力、の順になっている。すなわち健康の面で心配している母親はわずか6％だが、学力については思うにまかせないと考えている母親は45％もいる。また、学力への不満は学年と共に増加していく(P.21表2・表3・表4)。

**⑤ よすぎる親子関係？**

思春期という時期を考えると、本サンプルの母親のうち、父子関係、母子関係がよくないと答える者がそれぞれ6％と3％でしかない、という数字は、親離れ子離れに問題があること（自立の遅れ）を示すものではないだろうか（P.22表5）。

**⑥ 子どもの性格を自分と比べて**

中学生時代の自分と比べて、現在のわが子をどう評価するか見てみると、全体としては予想外にわが子の評価がよいことが見いだされる。とくに性格的行動的側面のうち、現代的な「軽さ」の側面についてはそうである。「根性がある、成績がよい、耐性のある」などの「重さ」的側面については、昔の自分のほうが秀れていた、とわが子に不満をもつ母親もいる（P.24表６）。

**⑦ 子どもの評価に関わる要因**

低学歴の母親ほど、子どもを「重さ」の面で評価し、また年長の母親ほど子どもの「軽さ」を自分になかった面として評価する傾向がある。また子どもが低学年のうちは「重さ」を評価するが、高学年になるにつれ「軽さ」の評価へと変わっていく。また親子関係のよい者は、子ども評価も各側面でよくなっている（P.26表７）。

**⑧ 教育期待に関わる性差別**

戦後四十数年を経たというのに、依然として女の子になぜこれほどの教育期待の低さが見られるのか。性差別をしているのは社会一般ではなく、女の子の親なのではなかろうか（P.28表８）。

**⑨ 子どもに将来つかせたい職業**

責任も競争もつきまとう「重い」職業より、わりと気軽にやれる「軽い」仕事のほうをわが子に望む母親たちが、予想外に多くなっている。女の子については、専業主婦の生き方を望む親は３割を切っている（P.29表９）。

**⑩ 女の子の自己実現への献身**

娘の場合でも嫁の場合でも、自分を犠牲にしてまでその自己実現に協力しよう、献身しようとする構えは、今のところあまり母親たちの中に見られない（P.31表10）。

**⑪ 自分の母親ぶりの評価**

自分と自分の母親を比較させると、自分の母親ぶりに予想以上によい自己評価をしており、自信をもっている。夫に至っては一層その傾向がある(P.34表13)。また自分の両親についてのイメージも、昔風の偉い父母でもなく、といって現代風の父母でもないと、何か中途半端であるようだ（P.35表14・表15)。

**⑫ その自己受容**

自分を「まあまあ」と自己受容できる母親は全体の４分の３ほどであり、幼児の母親たちと比べてもその評価はほとんど変わらない(P.37表16)。

**⑬ 家族との心理的距離**

この世の中で誰が一番愛され好ましい対象として把握されているかについて見ると、母親＞夫＞父親＞自分という順になる。これは幼児の母親の場合も変わらない(P.38表17)。

**⑭ 母親の自己価値感に関わる要因**

母親が自分に誇りや満足（自己価値感）をもてなくなる条件は

1）母子関係が悪い
2）夫が嫌い
3）子ども（一般）が好きでない
4）自分の父親が嫌い
5）年齢の若い母親
6）子どもの学力が低い

等である(P.39図６)。

**⑮ 最後に**

子どもは変わった、といわれているが、その背後にいる母親たちも、また確実に変わってきているという印象を強くする。

# はじめに

『モノグラフ・中学生の世界』での母親対象の調査レポートは、今回が2度目である。vol. 3「中学生の母親の意識」(昭和53年）では、30代後半から40代前半という、女性としてはやや人生にかげりの見え始めた年齢の母親たちが、いったい何を考えているのか、自分と子ども、また夫への評価とその生活充実感との関わりを明らかにしようと企図された。それから8年を経て、ここでもう一度同じテーマに挑戦してみようとしている。

女性の生涯の中で、子育てが大事業であることは、昔も今も変わりがないであろう。人としての自分をどう評価するか、自分の人生を意味あるものととらえることができるかどうかは、「母親としての自分」がどうその役割を十分に果たし得たか、またはそれを果たしつつあるか、という自己評価によって生み出されるものではなかろうか。

そして中学生の子どもと言えば、母親の子育て事業も確実にその半ばを過ぎて、一応の答えが出はじめている時期にあたる。いわば電算機に入力したデータが、何らかの数字となって打ち出されつつあるのを目にし始める時期のようなものである。自分が生涯をかけて打ち込んだ事業が、成功の部類に入りそうかそれとも失敗か、それぞれの母親の裡におよそのりんかくが浮かび上がってきているのではなかろうか。それによって母親の自己価値感や生活充実感も、より確かなものとなったり、またはあやふやなものとなってきているのではなかろうか。

このレポートは、vol. 3と同じ中学生の母親の心理というテーマに、とくに臨床心理学の重要な概念である自己価値感（セルフ・エスティーム）の側面から迫ってみようとするものである。子どもの現在によって母親たちがどう充たされ、どう自己価値感を確立しているか。いわば母親たちの生きがいの一側面を明らかにしようとするものである。

**〔調査概要〕**

**対象●**中学生の母親　東京と埼玉の3校の公立中学校に在学する生徒の母親1,321名
**期間●**昭和61年7～8月
**方法●**学校通しによる調査で、生徒に調査票を持ち帰らせて記入後回収した。

（比較資料
**対象●**幼児の母親　東京と神奈川の幼児をもつ母親678名
**期間●**昭和60年7月）

# 第Ⅰ章 調査対象の属性

図1から図3までと表1には、サンプルとなった母親たちの属性を掲げた。なお比較のため前回の調査（昭和53年）のサンプルの属性も掲げてある。本サンプルの属性を明らかにすると同時に、この8年間で平均的な主婦たちの属性がどう変化したかをも、合わせて見ていくことにしよう。

まず図1は子どもの数、図2に母親の年齢を掲げた。子どもの数は2人が6割、年齢は30代後半から40代前半が全体の8割を占める。年齢層としては、前回よりやや若くなっているものの、大差はない。

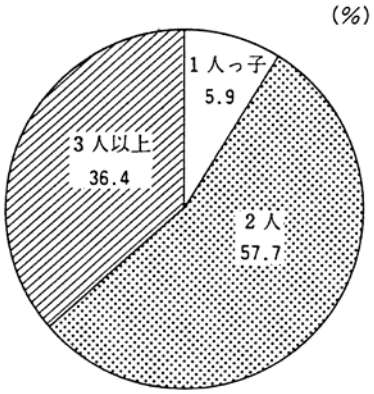
図3は母親の職業と学歴である。本サンプルのうち専業主婦はわずかに3割でしかない。この点は前回の5割を大きく下回り、働く母親の時代がきていることを実感させられる数字である。しかし面白いのは、家業の手伝いやフルタイムで働く母親たちはこの8年間にほとんどふえていないのに、パートタイマーが18%から30%と増加してきていることだ。働く母親の時代と言っても、母親が本格的に働くための条件はまだ整っていないのかもしれない。

また学歴は図が示すように、この8年間で中卒者が大きくへり、高卒者が大きくふえている。しかしここでも面白いのは、大卒・短大卒者の割合はそれほど増加していない点である。この8年間に、高卒者がふえパートタイマーはふえたが、大卒で本格的に働く母親たちの割合はそれほどふえていないとまとめることができそうだ。

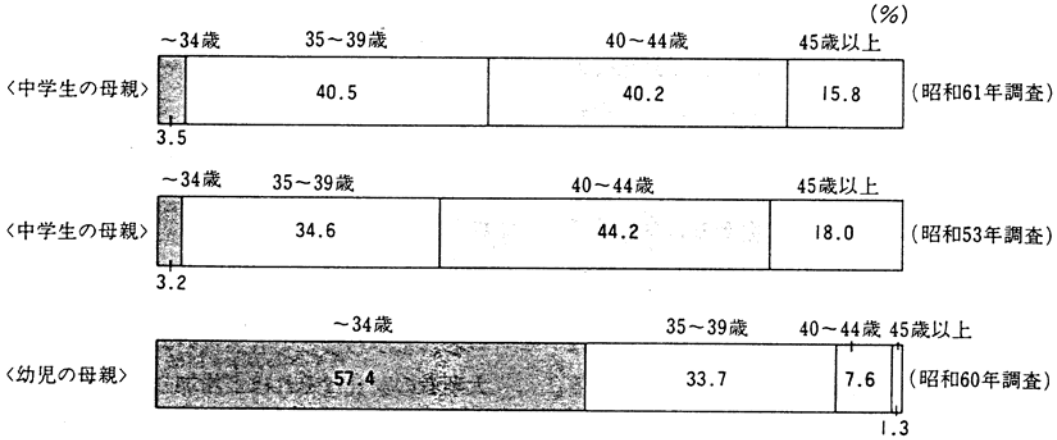
なお図4には「子ども好きか（一般に）」をたずねた結果を掲げた。この数字は、一応母親の役割が本人にとってどのくらい無理な

く果たせそうかを示す手がかりの一つとも言えそうだ。むろん他人の子は嫌いだがわが子は好き――という母親がいないわけではないが、しかしわが子であるが故に好きなだけで、「子どもは一般に嫌い」という場合には、わが子と言えども何らかの点で自分の意に染まない部分があったり、期待に応えていない部分が出てくると、これが無意識のレベルでわが子への感情にも影響を及ぼすのではなかろうか。そうした視点で図4を眺めると、1～2割の母親は、母親業を必ずしも自分の自己実現や生活の充足感につながるものとしてとらえることのむずかしい層であるかもしれないことになる。

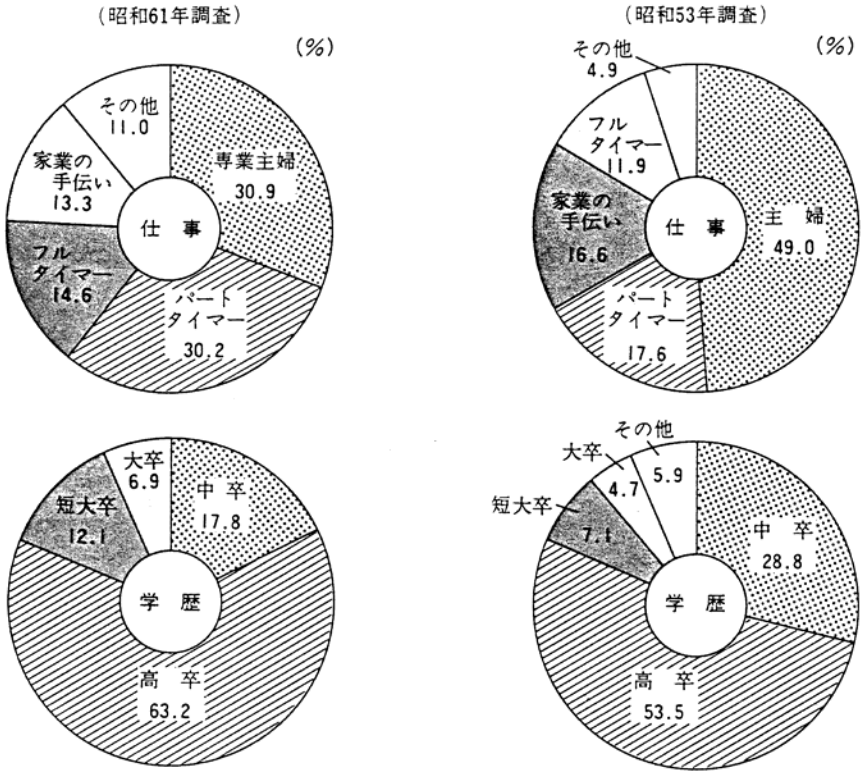
（図1）子どもの数




（図2）母親の年齢



（図３）母親の職業と学歴

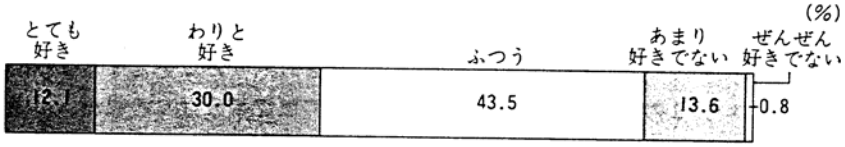



（表１）対象の子ども

（人）

| | 1　年 | 2　年 | 3　年 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 男　子 | 227 | 258 | 184 | 669 |
| 女　子 | 226 | 241 | 185 | 652 |
| 計 | 453 | 499 | 369 | 1,321 |

（図４）子ども好きか（わが子ではなく子ども一般について）



# 第II章 子どもはうまく育ったか

さて生まれた時より手塩にかけて育て中学生までに成長したわが子は、果たして自分の献身と期待に応えてくれるような「よい子」に育ったのだろうか。ここでは母親たちのもつ子ども評価や不満の有無について見ていくことにしよう。

## 1．4つの側面で

**表2**はわが子を、期待以上によく育っているか、それとも思い通りには育たなかったと感じているのか、を示している。表が示すように、最もうまく育っているのは子どもの「健康」面で、うまくいっていないケースはわずか6％でしかない。この数字は「性格」では15％、「しつけ」で31％、「学力」で45％と急速にふえていく。「健康」で「気だて」(性格)がよければ、昔の親たちはそれをベストの状態として評価しただろう。しかし何のめぐり合わせか、高学歴社会にわが子を育てる羽目になった現代の母親たちは、「学力」といういちばん達成のむずかしい側面で、わが子の価値を評価せざるをえなくなっている。そしてこの面で半分近くの親が、不満や失望感を抱いている。不幸な時代と言えそうだ。

母親の評価が子どもの成長と共に、どのような推移をたどるか。**表3**に、幼児の母親調

査（昭和60年）の結果を掲げて比較してみた。表が示すように、「しつけ」のむずかしさは幼児の場合も中学生の場合もそう変わらないようだが、幼少期ほど「健康」や「性格」への心配や不満が大きいことがわかる。そして子どもの成長につれて、この面での心配や不満がへる代わり、新たに「学力」面での問題が悩みのタネとなる、といった経過が見いだされる。

また**表4**に掲げたように、同じ中学生でも学力への不満は、男子・女子とも学年の上昇につれて少しずつ高まっていく様子も見られる。現代は子どもの成長が即、親の喜びの増大、とはストレートにつながらなくなった時代なのであろう。

**（表2）子どもはうまく育っているか**

（%）

| | 期待以上 | まあまあ | 少し・全くうまくいっていない |
|---|---|---|---|
| 健　康 | 20.2 | 73.8 | 6.0 |
| 性　格 | 6.7 | 77.9 | 15.4 |
| しつけ | 3.2 | 66.3 | 30.5 |
| 学　力 | 5.2 | 50.3 | 44.5 |

**（表3）子育ての失敗（「少し・全くうまくいっていない」割合）**

└──→子どもの年齢別

（%）

| | 中学生 | 幼　児 |
|---|---|---|
| 学　力 | 44.5 | 15.4 |
| しつけ | 30.5 | 31.7 |
| 性　格 | 15.4 | 20.2 |
| 健　康 | 6.0 | 12.8 |

**（表4）学力への不満（「少し・全くうまくいっていない」割合）**

└──→学年・性別

（%）

| | 男　子 | 女　子 |
|---|---|---|
| 1　年 | 43.8 | 37.7 |
| 2　年 | 44.5 | 43.8 |
| 3　年 | 50.0 | 48.9 |

# 2．親子関係

さて中学生時代とは、いわゆる「思春期」に当たり、とり扱いのむずかしい年頃とされている。親子関係にも問題が出てくるはずの時期である。この点を見たのが**表5**であるが、表が示すように親子関係は、予想外にうまくいっていて、多少とも「よくない」としているのは父子関係で6％、母子関係では3％にすぎず、表には掲げなかったが、子どもの学年や性別とも全く関係が見いだされなかった。しかしこの年齢の子どもたちがこれほど親とうまくいっているということは、逆に言えば、発達段階の中で正常な成長の「節目」を通過していないことにもなるのではないか。日本の青少年の「自立」の遅れは折にふれて指摘されるが、この「うまくいきすぎている親子関係」の中にも、それが見えているとも言えそうだ。

（表5）親子関係

(%)

| | とてもいい | かなりいい | ふつう | あまり・全くよくない |
|---|---|---|---|---|
| 父子関係 | 16.0 | 18.1 | 60.2 | 5.7 |
| 母子関係 | 13.8 | 22.2 | 61.2 | 2.8 |

# 第III章 子どもをどう評価するか

## 1．軽さと重さ

さて中学生になったわが子は、どんな成長ぶりを示しているのか。昔、中学生だった頃の自分と比べて、どこがどううまく育ち、どの点が不出来であるのか。親ならば心のうちでしょっちゅうしてみている評価を、18個の性格的行動的特性について、明らかにしてみた。なお表6はこれらを「軽さ」「重さ」「よい子」、の3つの側面に分けてまとめてある。

この「軽さ」「重さ」とは、筆者の所属する子ども調査の同人会「子どもの行動学研究会」での調査研究のプロセスで生まれてきた概念で、人についての行動的評価のうち、その昔日本社会で価値的とされたような、「ビッグな目標に、努力して到達する」ことに関連する特性（本レポートではこれを一応、行動力がある、よく勉強する、成績がよい、根性がある、正義感のある、耐性のある、としてみた）と、現代の社会で成功（または適応）していくために必要とされる特性（メカに強い、運動神経のある、面白い、冗談がうまい、物知り、人前で話す力がある、明るい、要領がいい、友人にやさしい）を設定してみたものである。とくに「軽さ」特性とは、いわゆるトランスポゾン的* （次頁脚注）とでも表現しうる現代人特有の行動的側面をさすものである。

これら18個の特性について、「子どものほうが秀れている」「同じくらい」「かつての自分（子どもと同じ年齢の）のほうが秀れていた」の３件法で答えてもらった結果が表６①～④に掲げてある。

表が示すように、トランスポゾン的側面については、全体としてわが子に対する評価はかなり良好である。「自分のほうが秀れていた（わが子のほうが劣る）」とする者は、平均して１割程度しかいない。半分は、「同じくらい」と答え、４割が「子どものほうが秀れている」と答えている。まさに現代っ子としての行動特性を、いまわが子の中に見ているのであろう。

しかし「重さ」的特性については逆に、「自分のほうが秀れていた」とする者が多くなり、「よく勉強し、行動力がある」点では子どもを評価し得ても、「成績、根性、耐性」については、「かつての自分のほうがよりあった」とする者の数が多くなっている。

最後に項目数は少ないが、親にとっての「よい子」的側面について見ると、とくに「身のまわりの片づけ」「お手伝い」については圧倒的に「自分のほうがちゃんとやった」と答えている。

しかし面白いのは「親孝行」で、これはほ

**（表６）子ども評価**

└──→自分と比べて

**① 軽さ特性**

（%）

| | 男子 | | |
|---|---|---|---|
| | 子どもが上 | 同じ | 自分が上 |
| 1.メカに強い | 78.6 | 17.5 | 3.9 |
| 2.運動神経のある | 45.5 | 35.1 | 19.4 |
| 3.面白い | 43.4 | 49.2 | 7.4 |
| 4.冗談がうまい | 42.4 | 50.6 | 7.0 |
| 5.物知り | 41.2 | 42.5 | 16.3 |
| 6.人前で話す力がある | 27.2 | 55.2 | 17.6 |
| 7.明るい | 26.7 | 63.8 | 9.5 |
| 8.要領がいい | 25.8 | 62.3 | 11.9 |
| 9.友人にやさしい | 24.2 | 66.4 | 9.4 |
| 平均 | 39.4 | 49.2 | 11.4 |

| | 女子 | | |
|---|---|---|---|
| | 子どもが上 | 同じ | 自分が上 |
| 1.メカに強い | 48.7 | 44.7 | 6.6 |
| 2.冗談がうまい | 45.1 | 48.7 | 6.2 |
| 3.面白い | 41.2 | 52.8 | 6.0 |
| 4.運動神経のある | 35.9 | 40.1 | 24.0 |
| 5.明るい | 35.2 | 56.8 | 8.0 |
| 6.物知り | 30.8 | 47.9 | 21.3 |
| 7.友人にやさしい | 30.5 | 64.1 | 5.4 |
| 8.要領がいい | 29.7 | 56.1 | 14.2 |
| 9.人前で話す力がある | 29.3 | 58.7 | 12.0 |
| 平均 | 36.3 | 52.2 | 11.5 |

＊このトランスポゾンとは、『新人類の誕生』（TBSブリタニカ、昭和60年）を書いた吉成真由美氏が使ったもので、同書によれば、「トランスポゾンというのはDNAの中にあって、しょっちゅう切れてはまた別の場所に移動する遺伝子のことで、挿入配列を両端に持っているために、DNAのいたるところにすっぽりともぐり込むことができる。（中略）その無意味を旨とするような軽い動きを見ていると、ちょうど現代の新しい若者世代の姿に実に見事にオーバーラップしている。（中略）非常に移動性が高く、どの分野にもある程の好奇心を示して、それなりにネットワークを作り、周囲に多大な影響や反響をまき起すのであるが、そのいずれにも完全にコミットせずに、また別の場所に移動して行く」。（P.１～P.３）

とんど差がない。親孝行だったのはこの親たちの親の世代で、今の母親世代はすでに親不孝世代の人びとなのかもしれない。

さて④では、3つの特性間の平均値の比較をしてみた。男子・女子の母親とも、「トランスポゾン的な特性には秀れているが、あまり親にとってのよい子ではない」と評価していることがわかる。

② 重さ特性

(%)

| | 男子 | | | | 女子 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 子どもが上 | 同じ | 自分が上 | | 子どもが上 | 同じ | 自分が上 |
| 1.行動力がある | 34.6 | 48.2 | 17.2 | 1.よく勉強する | 35.1 | 45.4 | 19.5 |
| 2.よく勉強する | 26.6 | 48.7 | 24.7 | 2.行動力がある | 29.6 | 55.2 | 15.2 |
| 3.成績がよい | 25.8 | 38.5 | 35.7 | 3.成績がよい | 25.8 | 43.5 | 30.7 |
| 4.根性がある | 18.5 | 47.2 | 34.3 | 4.根性がある | 19.9 | 53.2 | 26.9 |
| 5.正義感のある | 18.3 | 63.5 | 18.2 | 5.正義感のある | 18.9 | 62.8 | 18.3 |
| 6.耐性のある | 11.4 | 41.9 | 46.7 | 6.耐性のある | 13.2 | 46.9 | 39.9 |
| 平均 | 22.5 | 48.0 | 29.5 | 平均 | 23.8 | 51.1 | 25.1 |

③ よい子特性

(%)

| | 男子 | | | | 女子 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 子どもが上 | 同じ | 自分が上 | | 子どもが上 | 同じ | 自分が上 |
| 1.親孝行 | 17.4 | 63.1 | 19.5 | 1.親孝行 | 15.0 | 66.0 | 19.0 |
| 2.身辺整理 | 9.8 | 37.6 | 52.6 | 2.身辺整理 | 14.1 | 41.7 | 44.2 |
| 3.よく手伝う | 5.2 | 21.2 | 73.6 | 3.よく手伝う | 6.8 | 24.5 | 68.7 |
| 平均 | 10.8 | 40.6 | 48.6 | 平均 | 12.0 | 44.0 | 44.0 |

④ 3つの特性の比較(「子どもが上」の割合)

(%)

| 男子 | 女子 |
|---|---|
| 軽さ　重さ　よい子 | 軽さ　重さ　よい子 |
| 39.4 ＞ 22.5 ＞ 10.8 | 36.3 ＞ 23.8 ＞ 12.0 |

# 2．母親の属性との関わりで

次に**表7**は、これらの特性評価と母親たちのもつ属性との関係を見たものである。有意差の見いだされた項目は、上から、

①子どもの性格を「期待以上」「まあまあ」と評価した者（表2）は、「重さ」を含めた3つの特性のそれぞれによい評価を与えている。

②子どもの学力を「期待以上」「まあまあ」（表2）と評価した者は、「重さ」「よい子」的な側面で、子どもを評価する。

③低学歴の母親は、子どもを「重さ」的側面で評価するが、「よい子」とは評価しない。

④年長の母親は、「軽さ」的側面を評価するが、「よい子」とは評価しない。

⑤父子関係がよい（表5）と3つの特性ともよく評価されている。

⑥母子関係がよい（表5）と、「重さ」「よい子」の側面で評価されている。

⑦低学年の子については「重さ」が評価されるが、高学年になるにつれて次第に「軽さ」の評価へと移っていく。

⑧母親が仕事をもっているかどうかは、自己価値感、子の性別や数、兄弟中の位置とは関連がみられない。

**（表7）子どもの性格評価（軽さ・重さ・よい子）に影響する要因**

＊P＜.05　＊＊＜.01　＊＊＊＜.001　　P＝危険率（有意水準）

| | 軽さ | 重さ | よい子 | |
|---|---|---|---|---|
| 子育ての成否（性格） | ＊ | ＊＊＊ | ＊＊＊ | 性格を期待以上、まあまあとする者は、各特性にもよい評価 |
| 子育ての成否（学力） | — | ＊＊＊ | ＊ | 学力を期待以上、まあまあとする者は、重さ、よい子の面で評価 |
| 母親の学歴 | — | ＊＊＊ | ＊ | 低学歴の者は、重さの面で評価し、よい子の面で評価しない |
| 母親の年齢 | ＊＊＊ | — | ＊ | 年長の母親は、軽さの面で評価、よい子の面で評価しない |
| 母親の職業 | — | — | — | N．S．（有意差なし） |
| 父子関係 | ＊＊ | ＊＊＊ | ＊＊ | 父子関係がよいと、各特性ともよい評価 |
| 母子関係 | — | ＊＊＊ | ＊＊＊ | 母子関係がよいと、重さ、よい子の側面で評価 |
| 子どもの学年 | ＊ | ＊ | — | 低学年の母親は、重さを評価、高学年になると軽さを評価 |
| 子どもの性別 | — | — | — | N．S． |
| 自己価値感 | — | — | — | N．S． |
| 子ども好きか | — | ＊＊＊ | — | 子ども好きな親は、重さの面で評価 |
| 兄弟中の位置数 | — | — | — | N．S． |

# 第IV章 子どもの将来について

さてそうした子どもの現状の中で、子どもの将来についてはどんな期待がもたれ、また予測がされているだろうか。たとえ現在の子どもの成長が多少意に充たないものであっても、もしその見通しが明るいものなら、母親にとって子どもの現状の問題点は、それほど気にならないかもしれない。

## 1．親たちによる性差別

まず**表8**は、子どもにどこまで教育を受けさせたいかである。高校を卒業してすぐ就職（家業の手伝いを含む）してほしいと望む母親は男子で1割、女子で2割。女子はその後2年間の教育でよいとする者が5割と、男子（2割）と大差であり、その後の4年制大学進学への期待も同様である。いわば親たちのしている「性差別」がこれほどはっきりしている国は珍しいのではなかろうか。この点の意識について、日本はかなり後進国だといわなければならないかもしれない。

（表８）教育期待（高校を卒業後）

（%）

| | 就職・家業 | 専門学校・短大 | 私立大 | 国立大 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 11.5 | 21.5 | 17.5 | 46.1 | 3.4 |
| | | ∧ | ∨ | ∨ | |
| 女子 | 19.5 | 53.0 | 9.9 | 15.7 | 1.9 |

# 2．ビッグを望まない

**表9**は「できることならさせたい（させたくない）」職業である（2つずつ同種類で難易度を違えたものを用意したが、アンケート中の提示はランダムにしてある）。

表が示すように、どの職業も「させたい」親もいれば、「させたくない」親もいる。しかし全体として親たちが望むのは、

**〈男子〉**

| | |
|---|---|
| 中度の専門職（技師など） | 47.0% |
| 中級公務員 | 51.7% |
| 腕のいい職人 | 33.8% |
| 高度の専門職（医師など） | 32.8% |
| 上級公務員 | 28.6% |
| 気楽な会社のサラリーマン | 25.5% |

**〈女子〉**

| | |
|---|---|
| 先生や公務員 | 53.0% |
| 副収入型の仕事（ピアノの先生など） | 41.1% |
| 専業主婦 | 28.7% |

となっていて、とくに男子の場合、むずかしく競争のはげしい職業は敬遠され、なりやすい中度の職業がより上位に期待されているのは面白い。

また商店の経営や農業はその経営規模の大小に拘らず敬遠され、若い人に人気のあるマスコミ関係や自由業も同様である。

また女子の場合は、家での副収入型と、フルタイム型に人気が集まっている。専業主婦を望む母親は3割弱と少ないが、といって（男子と同じく）高度の専門職も嫌われる。やはり「両立できる程度の範囲で」が本音であって、性別を越えた生き方までは望まれていないとみてよいだろう。しかし女性が多少ともビッグな職業に就こうとする場合には、現状では家族の協力がどうしても不可欠である。夫はむろんだが、その母親がとくに献身的に家事や育児を支えないと、今の日本では女性がスケールの大きい仕事をしていくことはむずかしい。次に娘（または嫁）がどのような立場に立たされたとき、母親として献身する構えをもつかをたずねてみよう。

## (表9) 子どもにつかせたい職業

〈男子の場合〉

(%)

| | | させたくない | させたい* |
|---|---|---|---|
| A) | 競争のきびしい一流企業 | 46.2 | (16.2) |
| | 気楽な会社のサラリーマン | 27.9 | (25.5) |
| | 高度の専門職(医師など) | 30.5 | (32.8) |
| | 中度の専門職(技師など) | 15.9 | (47.0) |
| | 上級公務員 | 31.5 | (28.6) |
| | 中級公務員 | 15.8 | (51.7) |
| | 大商店の経営 | 32.3 | (17.6) |
| | 中小の商店経営 | 35.6 | (20.7) |
| B) | 芸術家 | 55.3 | ( 7.4) |
| | タレント・スポーツ選手 | 51.9 | (13.2) |
| | マスコミ関係(新聞記者等) | 46.5 | (13.8) |
| C) | 農・漁業 | 44.0 | ( 9.8) |
| | 腕のいい職人 | 22.5 | (33.8) |

〈女子の場合〉

(%)

| | させたくない | させたい* |
|---|---|---|
| 専業主婦 | 21.0 | (28.7) |
| 副収入型の仕事(ピアノの先生など) | 15.2 | (41.1) |
| パートタイマー | 43.7 | (12.5) |
| 夫と店の経営 | 42.6 | (12.2) |
| 先生や公務員 | 17.2 | (53.0) |
| 高度の専門職 | 54.3 | (14.3) |

*他は子どもにまかせる

# 3．献身はごめん

**表10**が示すように、母親たちは全体として思ったより薄情だ。いや少なくとも娘(嫁)の人生に全面的に献身する構えはもっていない（娘と嫁の場合を分けて検討してみても、ほぼ数値の差はない)。むろんテニス以外のケースでは、「都合がつく場合は協力する」と答える者が5割から7割に達するが、「あてにされては困る」という反応も多く、医師・薬剤師・先生などの専門的職業に就いた場合ですら「あてにされては困る」が2割もおり、「自分の仕事をやめてでも全面的にめんどうをみる」(本来、これが献身と言えるだろう)と答える者は1割でしかない。実際にそうした状況に直面した場合は別として、現代の母親は、とにかく女の子の社会的活躍を援助するという構えをあまりもち合わせないもののようである。

さて**表11**は子どもの将来の予測である。ここではどんな職業につくようになるかは別として、「軽さ」と「重さ」の特性のうち、子どもがそれぞれの側面でどのくらいうまくやっていけそうか、見通しをたずねてみた。

全体として「重さ」の側面でうまくやっていくことには多少悲観的な見通しだが、「軽さ」の部分では子どもの上にかなりの信頼が置かれていることがわかる。

## （表10）子に献身する構えはあるか

└──→娘または嫁の場合

（%）

| | 本人たちの力でやってもらう（あてにされては困る） | あなたの仕事をやめてでも全面的にめんどうをみる | 都合がつく場合は協力する |
|---|---|---|---|
| テニスに熱中 | 68.5 | 1.6 | 29.9 |
| ＰＴＡ役員で多忙 | 47.0 | 1.8 | 51.2 |
| ボランティアで多忙 | 41.0 | 2.9 | 56.1 |
| パートタイマー | 39.6 | 2.5 | 57.9 |
| タレント、デザイナー | 31.5 | 8.0 | 60.5 |
| 医師など | 20.4 | 14.3 | 65.3 |
| 薬剤師など | 18.8 | 11.8 | 69.4 |
| 先生 | 18.3 | 11.8 | 69.9 |
| 双子の出産 | 10.3 | 15.2 | 74.5 |
| 家族が入院 | 2.2 | 35.5 | 62.3 |

## （表11）子どもの将来をどう予測するか

（%）

| | | ぜったいできる | たぶんできる | できそうもない |
|---|---|---|---|---|
| 軽さ | 職場の同僚とうまくやっていく | 22.0 | 72.3 | 5.7 |
| | 上司とうまくやっていく | 13.5 | 76.6 | 9.9 |
| | 職場の雰囲気を明るくする | 15.0 | 63.6 | 21.4 |
| 重さ | 自分のやっている仕事では、だれにも負けない人間になる | 7.8 | 60.3 | 31.9 |
| | 自分で積極的に仕事を開拓していく | 9.4 | 50.4 | 40.2 |
| | 同期入社の人より早く出世する | 2.7 | 33.3 | 64.0 |

# 第Ⅴ章 母親としての自信

さてそうした子育てのプロセスで、今、母親たちは自分の母親能力とでもいうべき面を、どのように評価しているのだろうか。母親たちはさまざまな側面で、昔と比べてその役割を十分に果たしていないと折々に言われつづけているが、当の母親たちはどう思っているのか。

## 1．母親と比べた自分

**表12**の①によれば母親たちは意外にも、自分の母親ぶりに、かなり自信をもっている様子であり、表が示すように、自分より自分の母親のほうが秀れていたと評価する項目はほとんど見当たらず、大方が五分五分かむしろ自分のほうがよい母親行動をとっていると評価している。これを見ていると、昔の母親はそんなにも教育に関心が薄かったのか、また「献身的でしつけや家事をきちんとこなしていた」と言われていたのは幻想だったのか、という気にさせられる。

ちなみに**図5**によると、このサンプルの母親は現在70歳前後であり、終戦時はその人びとは30歳前後。つまり終戦後の混乱期に母親業をした人びとで、献身もしつけも、家事も何一つ十分にはできなかったのかもしれない。

それが娘たちにこうした低い母親評価を生み出しているのかもしれないとも考えられる。

ちなみに、表12の②は昭和60年7月に、東京と神奈川の幼児の母親 678名に行われた調査の結果を掲げたものだ。このサンプルは図2に掲げたように、20代後半から30代前半の人びとが多く、本サンプルと約10歳の開きがあるが、自分のほうが教育熱心と評価している点は同じだが、「献身的、家事をきちんとやる」については明らかに自分の母親のほうを評価している。つまり、若い母親はそれなりに未熟な自分を自覚して「とても自分の母親ほどにはできない」と思っているが、10年を経て中年にさしかかる頃には、それなりの母親業の歳月が自信となって「親より自分のほうがけっこうよくやっている」となるのかもしれない。

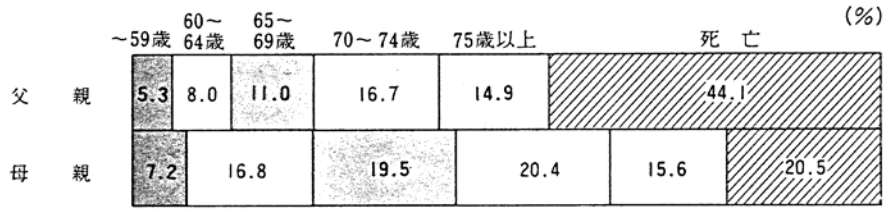
また**表13**は、夫と自分の父親との比較である。これも「きびしさ」以外は、自分の父親の場合よりさらに夫を高く評価している。自分の父親よりよい父親が、わが子の父親ということになる。

**(表12) 母親と自分を比べて**

(%)

| | ① 中学生の母親 | | | ② 幼児の母親 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 自分のほうが上 | 同じくらい | 親のほうが上 | 自分のほうが上 | 同じくらい | 親のほうが上 |
| 教育熱心 | 56.4 | 36.6 | 7.0 | 41.4 | 45.5 | 13.1 |
| 献身的 | 29.2 | 44.5 | 26.3 | 17.8 | 37.8 | 44.4 |
| しつけ | 26.4 | 53.7 | 19.9 | 31.4 | 44.5 | 24.1 |
| 家事 | 22.9 | 46.6 | 30.5 | 18.1 | 33.1 | 48.8 |
| きびしさ | 21.8 | 56.7 | 21.5 | — | — | — |
| やさしさ | 17.8 | 64.1 | 18.1 | 17.5 | 54.2 | 28.3 |

**(図5) 対象の両親の年齢(現在)**



（表13）夫と父親を比べると

（%）

| | 夫が上 | 同じくらい | 親が上 |
|---|---|---|---|
| 子どもとの接触 | 54.9 | 28.1 | 17.0 |
| 教育熱心 | 45.6 | 41.7 | 12.7 |
| 家事協力 | 40.8 | 36.4 | 22.8 |
| やさしさ | 37.8 | 49.1 | 13.1 |
| しつけ | 33.6 | 42.9 | 23.5 |
| きびしさ | 25.9 | 48.7 | 25.4 |

# 2．両親のイメージ

このように、偉かったはずの昔の父親と母親のイメージがわれわれの中でゆるぎ始めたところで、念のため、もっと直接的にそのイメージをとらえて見よう。**表14**、**表15**は自分の父母がどんな人だったかを、示したものである。まず表14で父親のイメージを見ると、予想外の結果である。圧倒的に肯定されているのは「仕事一途の人だった」だけで、昔風の父親イメージの「しつけにきびしかった」「意欲的な人だった」にも4割前後の者が「ちがった」と言っている。他のモダンな父親像を示す特性ではその声が5割から7割にも達している。

母親についても「家事をきちんとする」「意欲的な人」「しつけがきびしい」のように昔の良妻賢母的イメージに対してもいずれも3～4割の者が否定をし、むろんそれ以外の項目も5割から7割の否定率である。

すなわち父親も母親も、昔の「偉かった父親・母親」ではなく、といってモダンな今風の父親・母親像でもない。わりと中途半端な人たちというイメージをもっている。だから本サンプルの母親たちが、自分の母親ぶり、夫の父親ぶりに自信をもつことになるのだろう。しかし果たして現代の親たちは、そんなにもいい親なのだろうか。

（表14）父親の（昔の）人柄

（%）

| | とてもそう | わりとそう | ちがった |
|---|---|---|---|
| 仕事一途の人だった | 32.5 | 48.8 | 18.7 |
| 子どものしつけにきびしかった | 23.0 | 33.9 | 43.1 |
| 意欲的な人だった | 20.7 | 43.4 | 35.9 |
| 子ぼんのうで甘い父親だった | 14.1 | 34.1 | 51.8 |
| 子どもに教育熱心（とくに学業）だった | 7.6 | 24.9 | 67.5 |
| よくあなたと遊んでくれた | 6.9 | 21.7 | 71.4 |
| モダンで自由な考えをもった人だった | 6.3 | 22.2 | 71.5 |

（表15）母親の（昔の）人柄

（%）

| | とてもそう | わりとそう | ちがった |
|---|---|---|---|
| 家事をきちんとやる伝統的なタイプの母親だった | 28.6 | 44.5 | 26.9 |
| 意欲的な人だった | 17.2 | 46.5 | 36.3 |
| 子どものしつけにきびしかった | 16.6 | 38.3 | 45.1 |
| 子どもに教育熱心（とくに学業）だった | 8.0 | 27.1 | 64.9 |
| 新しい自由な考えを持った人だった | 7.2 | 31.1 | 61.7 |
| どちらかというと子どもに甘いタイプだった | 6.3 | 37.5 | 56.2 |
| あなたとよく遊んでくれた | 3.7 | 21.4 | 74.9 |

# 第VI章　母親たちの自己価値感(セルフ・エスティーム)

## 1．あなた自身を好きですか

人が生きていく際に一番大切とされるものについては、さまざまな角度から論ずることができるだろう。中でも人間の適応の問題をとり扱う臨床心理学においてはこれを、それぞれの人が自分という存在を基本的に受け入れることができるかどうか、すなわち自己受容、自己価値感の有無だと考える。

この点については、すでに特集の部分でもふれたが、それを測定する項目として、筆者は「あなたはご自分を好きですか」という表現をここ数年用いてみている。自分について、いくつかの面で欠点や価値の低さを自覚しながらも、トータルにはまあまあ自分を「よきもの」と感じとれる、そうした心の状態が、人が前向きに生きていくためにはどうしても必要と思われる。

**表16**は、その項目である。表が示すように、「とても気に入らない自分」6％、「あまり好きでない自分」19％と、合わせて4分の1ほどが自己に否定的、残り4分の3はおおむね自己肯定的である。このように「大好き」とまではいかなくとも「いくつか欠点はあるが、まあまあの自分だと思う」程度に自分を受け入れられないようでは、到底人生を積極的に歩むことはできないかもしれない。

この点については、右側の幼児の母親の場

合もほぼ数字は似ている。このくらいの自己肯定率が一般的な数字とみてよいかもしれないのである。

（表16）自分を好きか（自己受容）

（%）

| | 中学生の母親 | | 幼児の母親 | |
|---|---|---|---|---|
| 1．欠点だらけで、とても気に入らない（好きでない）自分 | 5.6 | 24.2 | 4.7 | 25.3 |
| 2．いくつかの欠点が気になって、あまり好きな自分ではない | 18.6 | | 20.6 | |
| 3．いくつか欠点はあるが、まあまあの自分だと思う | 57.2 | 75.8 | 58.7 | 74.7 |
| 4．欠点はあるが、全体としてはかなり自分に満足している（好きである） | 16.2 | | 14.8 | |
| 5．自分で自分を大好きである | 2.4 | | 1.2 | |

# 2．自分と母親との間に

さて次頁の表17は、自己受容率と他者受容率との比較である。表17によると、いちばん受容的（好意的）なのは自分の母親に対してであり、「まあまあ」を含めると受容率は94%、次いで夫が92%、父親89%、最後に自分の76%となっている。誰よりも（むろん自分よりも）母親を愛し、次が夫、次が父親という数字は、父親と子どもの心理的距離は母親ほどには近くないことを示す数字であるかに思われる。しかし夫が、父母の間に食い込むとは、改めて夫婦関係というものの意味を感じさせられる結果でもある。

この関係は、少し数字は違うものの幼児の母親の場合も全く同様に見いだされる。

（表17）家族との心理的距離（自己受容と他者受容）

① 中学生の母親

（%）

| | 自分 | < | 父親 | < | 夫 | < | 母親 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 嫌い | 5.6 | | | | | | |
| 少し嫌い | 18.6 | 24.2 > | 11.5 | > | 8.1 | > | 6.4 |
| まあまあ | 57.2 | | 44.8 | | 45.8 | | 42.3 |
| かなり好き | 16.2 | | | | | | |
| とても好き | 2.4 | 18.6 < | 43.7 | < | 46.1 | < | 51.3 |

② 幼児の母親

（%）

| | 自分 | < | 父親 | < | 夫 | < | 母親 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 嫌い・少し嫌い | 25.3 | > | 13.3 | > | 7.5 | > | 6.5 |
| まあまあ | 58.7 | | 42.3 | | 37.9 | | 35.2 |
| 好き・かなり好き | 16.0 | < | 44.4 | < | 54.6 | < | 58.3 |

# 3．自己価値感を低下させる条件

さてこうした自分に対する満足感、自己価値感は、どういう条件の下で高まり、または低められるのか。これは臨床心理学的にはかなり興味ある問題である。

この点を見るために、図6に掲げたように、数量化II類を用いて14個の条件の重みを計算してみた。図の見方は右に並んでいる条件ほど自己価値感の低さに関わりをもち、左にある条件ほど逆に自己価値感の高さに関わっていると見る。

図が示すように、母親が自分に誇りや満足を持てなくなる条件は、

① 母子関係が悪いこと
② 夫が嫌いな状態にあること
③ 子どもが好きでない（一般に）
④ 自分の父親が嫌いであること
⑤ 年齢が若い母親
⑥ 子どもの学力が低い状態にあること

であり、逆に自己価値感を高める要因は、

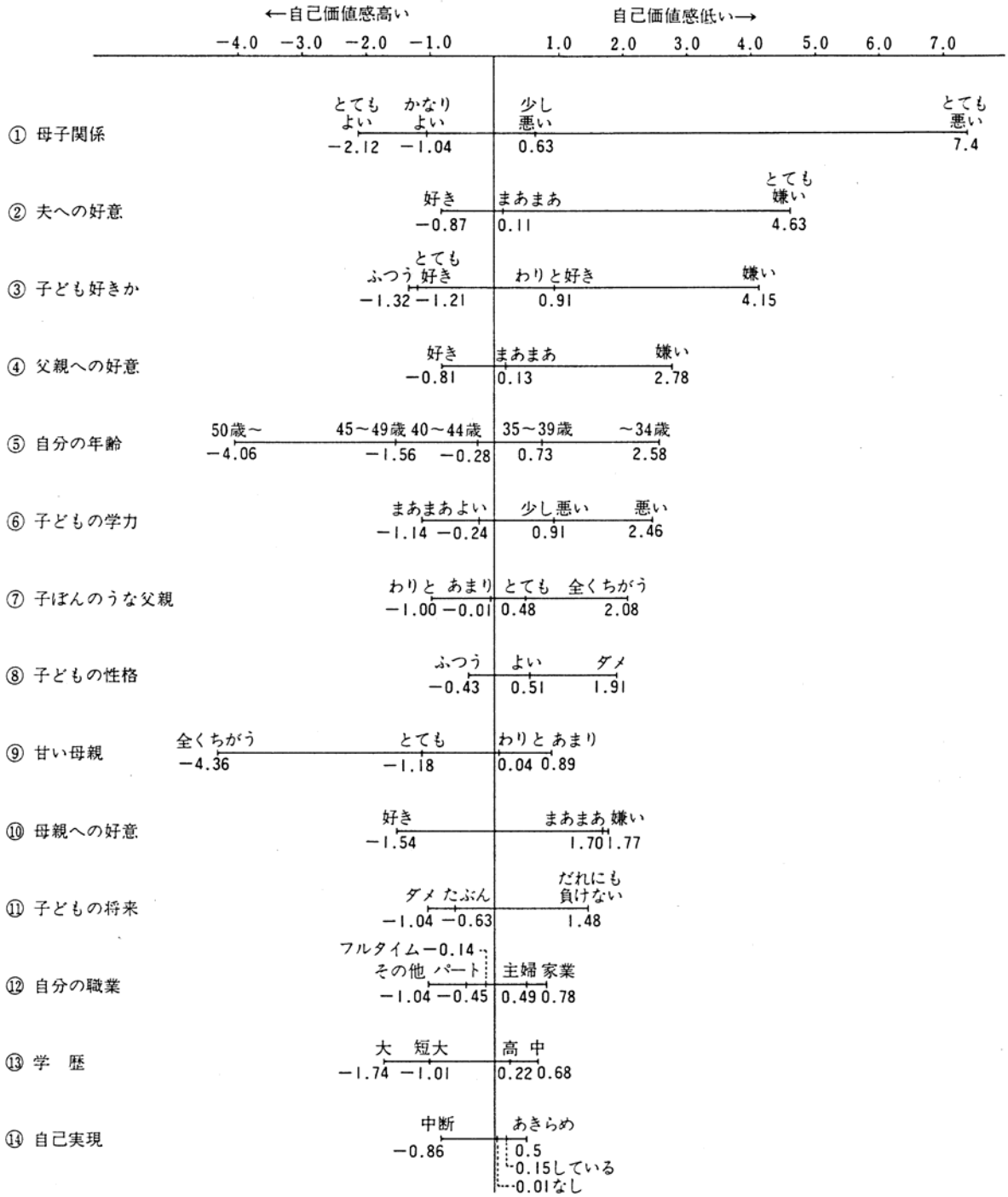
① （甘くと言うより）きびしい育てられ方をした母親
② 年齢の高い母親
③ 母子関係がとてもよい状態
④ 高学歴の母親

であることがわかる。

これらの結果が示すように、自分に好意をもてない母親は、子どもにも夫にも、父親にも他人の子ども（一般）にも、すべて好意をも

てない状況が見られる。おそらくそうした母親には、自分をとりまく全世界が悪意とストレスに充ちたものとして感じられ、いつも緊張が高くイライラして不気嫌な状態にあるのではなかろうか。

**（図6）自己価値感と関連する条件**



# 4．自己実現との関わりで

これまでの数々のデータが示すように中学生の母親たちは、部分的にそれなりの不満はあっても、全体としては夫に満足し子どもに対しての受け入れも（成績を除いては）まあまあである。また**表18**に示したように家族以外の人びととも、子どもが幼かった頃よりも、かなりそのつきあいの度を深めている。その結果が**表19**に示したように、自己実現を断念した人びとや中断していると考える人びとを子どもの幼児期に比べ減少させ、「けっこう現在もやりたいことはやっている」(45%)と答えることのできるような、ある種の充足感をもたらしているのではなかろうか。

今に至るまでの道のりには種々の希望や失意や挫折やあきらめなどの経過があったにせよ、年若い頃と比べて、とにかく現在はかなりの母親が自己の人生を肯定できる状態に到達しているかのようである。

それはそれで、中学生の母親たちの人生への適応のよさを示すデータとして、悪い結果ではないと思われる。しかしこのような仮の充足や自己受容が、先に表８で見たような、娘へのなぜか低い教育期待が形成されている背景となっているという気もする。

70年代にあれほど激しく欧米諸国、とくにアメリカを巻き込んだ婦人解放運動がなぜか日本にはほとんど影響しないままに過ぎ去ろうとしているのも、案外このあたりの「幸せ感」に原因があるのかもしれない。人生によく適応することは、その人個人にとっては大切であり、幸福で安定した状態を意味するかもしれないが、しかしほどほどの不適応感がないと社会の進歩も個人の進歩も実現しないのではなかろうか。

中学生の母親たちのこのような安定感が、次世代の社会化にどう影響するか、とくにどんなタイプの女の子たちを育て上げるか。筆者としては多少気がかりでもある。現在の中年の母親の姿を、もう一度その娘たちの上に再生産することでよいのかどうか、日本社会の持っているさまざまな問題点を考えると、筆者には疑問も残るのである。しかしこのテーマはまた別の機会に扱うことにしよう。

以上いくつかの角度から中学生の母親像を分析してきたが、最近の子どもは変わったと言われるその背後で、その母親たちの意識や行動の仕方もまた昔と比べ確実に変わってきている――と改めて感じずにはいられない。

（表18）対人関係

(%)

| | とてもよくつきあっている | | | 少しつきあっている | | ほとんどつきあっていない | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 幼児の母親 | | 中学生の母親 | 幼児の母親 | 中学生の母親 | 幼児の母親 | | 中学生の母親 |
| 自分の親戚 | 32.9 | < | 45.9 | 50.2 | 47.5 | 16.9 | > | 6.6 |
| 夫の親戚 | 29.4 | < | 39.8 | 49.2 | 51.0 | 21.4 | > | 9.2 |
| 隣　人 | 19.9 | < | 36.4 | 66.8 | 54.5 | 13.3 | > | 9.1 |
| 仕事関係の人 | 37.1 | | 33.9 | 49.2 | 50.7 | 13.7 | | 15.4 |
| 趣味の友人 | 10.3 | < | 24.4 | 30.4 | 45.8 | 59.3 | > | 29.8 |
| ＰＴＡの友人 | 13.2 | | 19.6 | 53.4 | 59.5 | 33.4 | > | 20.9 |
| 学生時代の友人 | 17.0 | | 15.4 | 50.3 | 48.0 | 32.7 | | 36.6 |

（表19）自己実現

(%)

| | 中学生の母親 | 幼児の母親 |
|---|---|---|
| いくつかあったが、子育てのほうが大事だと思いあきらめた | 17.2 | 11.9 |
| これといって特にやりたいことはなかった | 19.3 | 14.5 |
| とりあえず今は、中断している（いつか再開するつもり） | 19.0 | 45.4 |
| けっこう現在もやりたいことはやっている | 44.5 | 28.2 |

## 調査のお願い

私どもの研究室では、今現在のお母さんとお子さんの健康や生活について全国的な調査を行っております。お忙しいところまことに申しわけございませんが、ぜひご協力賜りますようお願い申し上げます。

まとめた結果を直接お返しできなくて申しわけございませんが、たぶん何かの機会に雑誌や新聞紙上などでその結果の一端をお目にかけることができるかもしれません。

ご記入はなるべくお母さんにお願い申し上げます。できれば2～3日以内に記入済の用紙を封筒に入れ、のりづけしてお子さんを通して担任までご提出ください。

なおこの調査はすべて統計的に処理いたしますので、ご迷惑のかかるようなことはございません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

調査責任者
東京学芸大学教授　深　谷　和　子

＜記入のしかた＞

あなたはカレーライスがすきですか？

| とてもすき | かなりすき | ふつう | すこしきらい | とてもきらい |
|---|---|---|---|---|
| 1 | ② | 3 | 4 | 5 |

あなたがもしカレーライスを［かなりすき］だと思ったら
上のように番号のところを○でかこんでください。

**1　まずこの調査票をお持ち帰りの［中学生］のお子さんについてうかがいます。**

お子さんは……1）性別　（1．男　2．女）
50.6　49.4　（数字は%）

2）学年　（中1　中2　中3）
34.2　37.8　28.0

3）（　　）人きょうだいの（　　）番目

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1人 | 5.9 | 1番目 | 48.4 |
| 2人 | 57.7 | 2番目 | 36.6 |
| 3人 | 31.2 | 3番目 | 13.5 |
| 4人 | 4.6 | 4番目 | 1.2 |
| 5人 | 0.6 | 5番目 | 0.3 |

**2　子育ては思うにまかせぬと言われますが、おたくの場合はいかがですか。**

お子さん（この用紙を持ち帰られた）は、現在までのところほぼ思いどおりに育っておられますか。

| | 期待以上である | まあまあである | 少しうまくいっていない | 全く思いどおりでない |
|---|---|---|---|---|
| 1）性格の面で | 6.7 | 77.9 | 12.5 | 2.9 |
| 2）健康の面で | 20.2 | 73.8 | 5.5 | 0.5 |
| 3）しつけの面で | 3.2 | 66.3 | 26.6 | 3.9 |
| 4）成績の面で | 5.2 | 50.3 | 32.0 | 12.5 |

| | とてもいい | かなりいい | ふつう | あまりよくない | かなりわるい |
|---|---|---|---|---|---|
| 5）おたくの父子関係は | 16.0 | 18.1 | 60.2 | 4.8 | 0.9 |
| 6）おたくの母子関係は | 13.8 | 22.2 | 61.2 | 2.3 | 0.5 |

**3　お子さんの性格や行動のしかたをご自分の昔(中学生の同じ学年のころ)と比べてどうお感じになりますか。**

| | 昔の自分の方が(やや)秀れていた | ほぼ同じくらい | 子どもの方が(やや)秀れている |
|---|---|---|---|
| 1）がまん強い | 43.3 | 44.3 | 12.4 |
| 2）冗談がうまい | 6.6 | 49.6 | 43.8 |
| 3）正義感が強い | 18.3 | 63.1 | 18.6 |
| 4）よく勉強する | 22.1 | 47.1 | 30.8 |
| 5）人前で話す力 | 14.8 | 56.9 | 28.3 |
| 6）根性がある | 30.7 | 50.0 | 19.3 |
| 7）明るい | 8.7 | 60.3 | 31.0 |
| 8）要領がいい | 13.0 | 59.2 | 27.8 |
| 9）親孝行(親にやさしい) | 19.2 | 64.6 | 16.2 |
| 10）身のまわりの整とん | 48.3 | 39.7 | 12.0 |
| 11）行動力がある | 16.2 | 51.5 | 32.3 |
| 12）友だちにやさしい | 7.4 | 65.3 | 27.3 |
| 13）物をよく知っている(知識量) | 18.7 | 45.2 | 36.1 |
| 14）メカに強い | 5.3 | 30.8 | 63.9 |
| 15）面白い(ひょうきん) | 6.7 | 51.0 | 42.3 |

| | 昔の自分の方が（やや）秀れていた | ほぼ同じくらい | 子どもの方が（やや）秀れている |
|---|---|---|---|
| 16）家の手伝いをする | 71.1 | 22.9 | 6.0 |
| 17）学校の成績 | 33.2 | 41.0 | 25.8 |
| 18）運動神経 | 21.7 | 37.5 | 40.8 |

**4　お子さんは 将来 職場で次のようなことができる人だと思いますか。**

| | ぜったいできる | たぶんできる | あまりできそうもない | 全くできそうもない |
|---|---|---|---|---|
| 1）職場の同僚とうまくやっていく | 22.0 | 72.3 | 5.5 | 0.2 |
| 2）上司とうまくやっていく | 13.5 | 76.6 | 9.6 | 0.3 |
| 3）職場の雰囲気を明るくする | 15.0 | 63.6 | 20.9 | 0.5 |
| 4）自分で積極的に仕事を開拓していく | 9.4 | 50.4 | 38.7 | 1.5 |
| 5）同期入社の人より早く出世する | 2.7 | 33.3 | 58.9 | 5.1 |
| 6）自分のやっている仕事では、だれにも負けない人間になる | 7.8 | 60.3 | 30.3 | 1.6 |

**5　できることならお子さんが高校を出られた後、どうしてほしいですか。**

1．就職　14.5
2．家業の手伝い　1.0
3．専門学校などへ入学　24.4
4．短大へ　12.7
5．私立大学へ　13.7
6．国立大学へ　30.9
7．その他（　　）　2.8

**6　できることなら、親としてお子さんにどんな仕事についてほしいですか。（お子さんの希望は別として）**

**＜お子さんが男子の場合＞**

| | ぜひさせたい | できればさせたい | どちらでもいい | どちらかというとさせたくない |
|---|---|---|---|---|
| 1）競争のきびしい一流企業のサラリーマン | 2.5 | 13.7 | 37.6 | 46.2 |
| 2）気楽にやれる会社のサラリーマン | 4.8 | 20.7 | 46.6 | 27.9 |
| 3）医者、弁護士、研究者などの高度の専門職 | 3.6 | 29.2 | 36.7 | 30.5 |
| 4）技師、教員など中度の専門職 | 9.3 | 37.7 | 37.1 | 15.9 |
| 5）大蔵省、外務省などの上級公務員 | 4.2 | 24.4 | 39.9 | 31.5 |
| 6）県庁、市役所などの公務員 | 14.7 | 37.0 | 32.5 | 15.8 |

| | ぜひさせたい | できればさせたい | どちらでもいい | どちらかというとさせたくない |
|---|---|---|---|---|
| 7）タレントやスポーツ選手 | 1.8 | 11.4 | 34.9 | 51.9 |
| 8）アナウンサー、新聞やＴＶの記者などのマスコミ関係 | 2.2 | 11.6 | 39.7 | 46.5 |
| 9）芸術家（作家、音楽家、画家、その他） | 1.5 | 5.9 | 37.3 | 55.3 |
| 10）農業、漁業など自然を相手の仕事 | 2.3 | 7.5 | 46.2 | 44.0 |
| 11）ちいさい（または中位の）お店の経営者 | 3.7 | 17.0 | 43.7 | 35.6 |
| 12）大商店（または大工場）の経営者 | 3.9 | 13.7 | 50.1 | 32.3 |
| 13）よい腕をもった職人 | 10.0 | 23.8 | 43.7 | 22.5 |

**＜お子さんが女子の場合＞**

| | ぜひさせたい | できればさせたい | どちらでもいい | どちらかというとさせたくない |
|---|---|---|---|---|
| 1）結婚したら専業主婦として暮らす | 7.2 | 21.5 | 50.3 | 21.0 |
| 2）ピアノやお花を教えるなど家にいて副収入をあげられる仕事をもって、主婦と両立させる | 8.8 | 32.3 | 43.7 | 15.2 |
| 3）パートで外へ働きに出る形で主婦業と両立させる | 1.7 | 10.8 | 43.8 | 43.7 |
| 4）家で商売をご主人とやって暮らす | 2.2 | 10.0 | 45.2 | 42.6 |
| 5）公務員や先生など、ある程度の専門的職業について、できるだけ主婦業とも両立させる | 13.9 | 39.1 | 29.8 | 17.2 |
| 6）医者や研究者、弁護士など高度の専門職につく（家事や育児は人の手を貸りる） | 3.1 | 11.2 | 31.4 | 54.3 |

**7　お子さんが将来、共働きをすることになって、あなたに育児や家事をしてほしいとたのまれたらどうなさいますか。（お子さんが男子ならお嫁さん、女子ならご本人の場合をお考えください）**

**お嬢さん(またはお嫁さん)の仕事の内容も考えてお答えください**

**＜お嬢さんやお嫁さんが＞**

| | あなたの仕事をやめてでも全面的にめんどうをみる | 都合がつく場合は協力する | 本人たちの力でやってもらう（あてにされては困る） |
|---|---|---|---|
| 1）小学校や中学校の先生になった | 11.8 | 69.9 | 18.3 |
| 2）タレントやデザイナーなどになった | 8.0 | 60.5 | 31.5 |
| 3）医者や弁護士になった | 14.3 | 65.3 | 20.4 |

| | あなたの仕事をやめてでも全面的にめんどうをみる | 都合がつく場合は協力する | 本人たちの力でやってもらう（あてにされては困る） |
|---|---|---|---|
| 4）薬剤師や看護婦になった | 11.8 | 69.4 | 18.8 |
| 5）パートで店員として勤めた | 2.5 | 57.9 | 39.6 |
| 6）（職業ではないが）テニスやバレーボールに熱中している | 1.6 | 29.9 | 68.5 |
| 7）ＰＴＡの役員でとても忙しい | 1.8 | 51.2 | 47.0 |
| 8）ボランティアでとても忙しい | 2.9 | 56.1 | 41.0 |
| 9）専業主婦だがふたごが生まれた | 15.2 | 74.5 | 10.3 |
| 10）お子さんの家族に長期の入院者が出た | 35.5 | 62.3 | 2.2 |

〜〜〜これから先、しばらくはあなたのご両親のことについてうかがいます〜〜〜

**8　1）あなたのご両親は今おいくつですか。（なくなられた方は６へ）**

| | ～59才 | 60～64才 | 65～69才 | 70～74才 | 75才～ | いない |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ① お父さま | 5.3 | 8.0 | 11.0 | 16.7 | 14.9 | 44.1 |
| ② お母さま | 7.2 | 16.8 | 19.5 | 20.4 | 15.6 | 20.5 |

**2）あなたが子どもの頃、お父さまはどんなお人柄の方でしたか。**

| | とてもそうだった | わりとそうだった | あまりそうでなかった | 全然ちがっていた |
|---|---|---|---|---|
| 1）子どもに教育熱心（とくに学業）だった | 7.6 | 24.9 | 54.2 | 13.3 |
| 2）仕事一途の人だった | 32.5 | 48.8 | 16.0 | 2.7 |
| 3）子どものしつけにきびしかった | 23.0 | 33.9 | 37.8 | 5.3 |
| 4）モダンで自由な考えをもった人だった | 6.3 | 22.2 | 42.4 | 29.1 |
| 5）意欲的な人だった | 20.7 | 43.4 | 30.2 | 5.7 |
| 6）子ぼんのうで甘い父親だった | 14.1 | 34.1 | 38.4 | 13.4 |
| 7）よくあなたと遊んでくれた | 6.9 | 21.7 | 47.1 | 24.3 |

3）ではお母さまのお人柄は

| | とてもそうだった | わりとそうだった | あまりそうでなかった | 全然ちがっていた |
|---|---|---|---|---|
| 1）子どものしつけにきびしかった | 16.6 | 38.3 | 41.5 | 3.6 |
| 2）子どもに教育熱心(とくに学業)だった | 8.0 | 27.1 | 55.6 | 9.3 |
| 3）職業に専念していた | 19.3 | 40.8 | 17.8 | 22.1 |
| 4）家事をきちんとやる伝統的な母親だった | 28.6 | 44.5 | 23.3 | 3.6 |
| 5）新しい自由な考えをもった人だった | 7.2 | 31.1 | 47.3 | 14.4 |
| 6）意欲的な人だった | 17.2 | 46.5 | 32.0 | 4.3 |
| 7）どちらかというと子どもに甘いタイプだった | 6.3 | 37.5 | 47.7 | 8.5 |
| 8）あなたとよく遊んでくれた | 3.7 | 21.4 | 58.1 | 16.8 |

9　1）あなたの現在の母親ぶりとご自分のお母さまの昔の母親ぶりとを比べてどうですか。

| | ご自分の方が秀れている | ご自分の方がやや秀れている | 同じくらい | ご自分の方がやや劣っている | ご自分の方が劣っている |
|---|---|---|---|---|---|
| ① 子どもの教育に関する熱心さ | 15.3 | 41.1 | 36.6 | 6.2 | 0.8 |
| ② 子どもに対するしつけ | 5.9 | 20.5 | 53.7 | 17.5 | 2.4 |
| ③ 家事の熱心さ | 5.8 | 17.1 | 46.6 | 24.0 | 6.5 |
| ④ やさしさ | 5.0 | 12.8 | 64.1 | 14.9 | 3.2 |
| ⑤ きびしさ | 4.6 | 17.2 | 56.7 | 17.2 | 4.3 |

| | 自分の方がしている | やや | 同じくらい | 自分の方がややしていない | 自分の方がずっとしていない |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑥ 子どもへの献身や自己犠牲 | 8.2 | 21.0 | 44.5 | 20.3 | 6.0 |

2）ではあなたのご主人の父親ぶりと、あなたのお父さまの（昔の）父親ぶりとを比べてどうですか。

| | ご主人の方が秀れている | ご主人の方がやや秀れている | 同じくらい | ご主人の方がやや劣る | ご主人の方が劣っている |
|---|---|---|---|---|---|
| ① 子どもの教育に対する熱心さ | 16.1 | 29.5 | 41.7 | 9.2 | 3.5 |
| ② 子どもに対するしつけ | 9.9 | 23.7 | 42.9 | 17.0 | 6.5 |

| | ご主人の方が秀れている | ご主人の方がやや秀れている | 同じくらい | ご主人の方がやや劣る | ご主人の方が劣っている |
|---|---|---|---|---|---|
| ③ 家事への協力ぶり | 15.6 | 25.2 | 36.4 | 14.3 | 8.5 |
| ④ やさしさ | 13.6 | 24.2 | 49.1 | 8.9 | 4.2 |
| ⑤ きびしさ | 8.2 | 17.7 | 48.7 | 19.5 | 5.9 |

| | ご主人の方がずっと多い | やや多い | 同じくらい | ご主人の方がやや少ない | ご主人の方が少ない |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑥ 子どもとの会話や接触 | 27.4 | 27.5 | 28.1 | 11.4 | 5.6 |

〜〜〜次は、あなたご自身とご家族のことについてうかがいます〜〜〜

**10　あなたは子ども好き（ご自分のお子さん以外の子ども一般について）な方ですか。それともあまり子ども好きな方ではありませんか。**

| とても子ども好き | わりと子ども好き | ふつう | あまり好きでない | ぜんぜん好きでない |
|---|---|---|---|---|
| 12.1 | 30.0 | 43.5 | 13.6 | 0.8 |

**11　1）あなたは、ご自分がお好きですか。それともあまり好きとは言えない方ですか。**

1）欠点だらけで、とても気に入らない(好きでない)自分　5.6

2）いくつかの欠点が気になって、あまり好きな自分ではない　18.6

3）いくつか欠点はあるが、まあまあの自分だと思う　57.2

4）欠点はあるが、全体としてはかなり自分に満足している(好きである)　16.2

5）自分で自分を大好きである　2.4

**2）では失礼ですが、ご主人については現在どんな感情をおもちですか。**

1）欠点ばかりでひどく気に入らない　2.4

2）いくつかの欠点が気になって、あまり好きなほうではない　5.7

3）いくつかの欠点はあるが、まあまあの人だと思う　45.8

4）欠点はあるが、全体としてはかなり好きと言えそうだ　32.9

5）とても大好きな人である　13.2

**3）では、あなたのお母さま（なくなられた方は、ご存命の頃の）を現在お好きですか。**

1）欠点だらけで気に入らない　0.5

2）あまり好きなほうではない　5.9

3）まあまあの母親だと思う　42.3

4）全体としては、かなり好きな母親と言えるだろう　29.3

5）とても大好きな母親である　22.0

**4）ではお父さま(なくなられた方は、ご存命の頃の)を現在お好きですか。**

1）欠点ばかりで気に入らない　2.1

2）あまり好きではない　9.4

3）まあまあの父親だと思う　44.8

4）全体としては、かなり好きな父親だと思う　25.2

5）とても大好きな父親である　18.5

**12　あなたは日頃、次にあげる人々とどの程度行き来してますか(付き合っていますか)。**

| | とてもよく付き合っている | 少し付き合っている | ほとんど付き合っていない |
|---|---|---|---|
| 1）隣近所の人と | 36.4 | 54.5 | 9.1 |
| 2）職場や仕事関係の人と | 33.9 | 50.7 | 15.4 |
| 3）趣味やスポーツなどグループ・サークル活動を通じて知り合った人と | 24.4 | 45.8 | 29.8 |
| 4）学校時代の友人と | 15.4 | 48.0 | 36.6 |
| 5）子ども（ＰＴＡなど）を通じて知り合った人と | 19.6 | 59.5 | 20.9 |
| 6）あなたの親類と | 45.9 | 47.5 | 6.6 |
| 7）ご主人の親戚と | 39.8 | 51.0 | 9.2 |

**13　あなたは、仕事や趣味などでやりたいことがあったけれども、今は子育てのために、それを中断またはあきらめてしまっているようなことがありますか。(1つえらんでください)**

1）いくつかあったが、子育てのほうが大事だと思いあきらめた　17.2

2）とりあえず今は、中断している(いつか再開するつもり)　19.0

3）これといって特にやりたいことはなかった　19.3

4）けっこう現在もやりたいことはやっている　44.5

14　あなたのご主人は、現在のお仕事に向いていると思われますか。それともあまり向いていないとお感じになりますか。

| 全く向いていない | あまり向いていない | まあまあ | わりと向いている | とても向いている |
|---|---|---|---|---|
| 0.7 | 5.7 | 19.8 | 48.4 | 25.4 |

本当はどんなお仕事に
向いているご主人だと思われますか。

[　　]

15　よろしかったら、大体の年齢をお聞かせください。

| | ～34才 | 35～39才 | 40～44才 | 45～49才 | 50才以上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1）あなた…… | 3.5 | 40.5 | 40.2 | 13.6 | 2.2 |
| 2）ご主人…… | 1.5 | 21.1 | 40.1 | 27.8 | 9.5 |

16　現在、職業をおもちですか。

1）あなた
1．もっていない(専業主婦)　30.9
2．フルタイムのお勤め　14.6
3．パートタイムのお勤め　30.2
4．自営業(工場や商店など)を手伝っている　13.3
5．その他　11.0

2）ご主人
1．お店をやっている　8.9
2．お店や工場に勤めている　3.7
3．会社員　58.4
4．公務員や先生　10.4
5．その他(1～4以外)　18.6

17　お母さん(あなた)が学校を出られた年齢(大体)をお聞かせください。

| 1）15才 | 2）18才 | 3）20才くらい | 4）22才以上 |
|---|---|---|---|
| 17.8 | 63.2 | 12.1 | 6.9 |

まことにお手数をおかけしました。ありがとうございました